

ペトロの信仰告白のあと、イエスは十字架への道行きを弟子たちに告げたのですが、弟子たちはイエスがみじめな十字架の処刑を受けることを理解することがありませんでした。イエスは苦難を受ける自らの先行きに神の意思を受け止めようともがいていたのですが、弟子たちは終末の時にローマの支配から解放してくれるメシアをイエスに期待していたので、まさかイエスが十字架の掛けられて殺される運命に向かっているとは考えもしませんでした。

フィリポ・カイザリアを離れると、イエスはガリラヤ湖を越えてタボル山へと向かい、ペトロとヨハネとヤコブを連れて、タボル山に登り、祈り始めたのでした。イエスが祈っていたのは、このままエルサレムへ向かうならば、祭司長や律法学者たちから迫害を受けることは明白で、殺される運命が待ち構えていることを神の意思として受け止めるかどうか悩んでたからです。けれども、弟子たちは人間的な思いからローマの支配から解放させてくれるメシアとしての期待しかもっていない。神の意思を問いつつ、現実には自分が無理解のままでも過ぎかねばならないというむなしさの中で、時間が過ぎ去っていくだけでした。タボル山でイエスが祈っていると、29節にあるように、イエスの顔の様子が変わり、つぎに、服が真っ白に輝きだしたのです。そこで、弟子たちがよく見ると、いるはずのない二人の人物とイエスと語りあっていたのです。その二人がモーセとエリヤであることがわかるのですが、彼らはイエスがエルサレムで迎えることになるイエスの最期の話をしていたのです。その二人がイエスから離れようとしているするとき、ペトロが突然話始めたのです。

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、もう一つはエリヤのためです」。けれども、ペトロは自分でも何を言っているのか、わからなかった、と断り書きがされています。

まず第一に、自分が何を言っているかわからない中でも、信仰告白のような大切な告白はなされることがあるということです。ペトロも他の弟子たちと同様に、イエスがどういうメシアであるかということがわかっていたいかなかったにもかかわらず、イエスをメシア＝キリストと告白することができたということです。普通、自分が語る内容は自分の考えが言葉として表に現れたものと理解しがちですが、自分が十分に理解していなくても、それらしい言葉は自分の口から出るということです。

第二に、モーセとエリヤがイエスと話をしているということは、当時の理解として、過去に死んだ者が現在の自分に現れて話をするということがなんの不思議な現象でもなく、当然のように実際に起こることだという認識を皆が持っていたということです。つまり、死者が現在生きている者に語り掛けるという認識があったということです。

第一の事柄のことですが、自分が何を言っているかわからない中でも人間は真実な言葉を語っているように勘違いすることがあるということです。ペトロの信仰告白は一人ペトロが行ったことではなくて、弟子たちの思いを代表したものでした。ペトロ

はイエスに無条件に従ってきた人物です。身に危険が迫っても、イエスから離反することはないと断言するのもペトロです。これも弟子たちを代表した発言です。ゲッセマネの園でイエスが苦悶の内に祈っているとときに、ペトロとヤコブ、ヨハネはすぐ近くまで来たが、眠ってしまった。そこに戻ってきたイエスが特にペトロに声をかけています。イエスが復活した朝、空虚な墓を訪れた女性たちは、そのことについて「弟子たちとペトロに告げなさい」と天使たちから命じられています。このように、ペトロは弟子たちの中で、その存在が代表格として描かれているのですが、それはペトロが弟子たちの中でもリーダーであったからではなく、人間の強さと弱さを最も体現している存在だからではないでしょうか。

イエスに何もかも捨てて従ってきた人物としては強さを發揮した人物ですが、3度もイエスを否んだ人物としては最も人間の弱さを体現した人物です。モーセとエリヤがエルサレムにおけるイエスの最期の話をしている時にも、イエスがモーセとエリヤと話している内容を深く「考えることもなく、そのまばゆい光景に3人の栄光の姿を見てしまい、立派な仮小屋を建てようと進言してしまうあたりは、そそっかしいわけです。自分の思いだけを優先してしまっているのです。こういうところも、人間らしいと言えば人間らしいのです。このような人間の強さや弱さ、思い込みやすさ、などの生身の人間の姿を体現しているペトロは、イエスにとつて自分が死んだ後の気がかりになる人物だったにちがいないのです。けれども、復活したイエスはガラリヤに先に行っているから、そこでやり直そうとペトロら弟子たちに言うのです。イエスの復活は、私たち信者に永遠の命を約束するものですが、永遠の命が与えられても、どのように生きていくかが解決してなくては、永遠の命も宝の持ち腐れになってしまいます。ペトロのような欠けを持った人間でも、もう一度やり直すことができるという復活のイエスの言葉は、永遠の命をどのように用いるかという私たち信者の希望につながっているのです。

2番目の死者が話しかけてくるということは、イエスの時代に生きていた人たちにとつて当たり前的事柄であったようです。このことは、戦後の日本では、まったく無視されてきたことですが、実は12年前の東日本大震災以降、私たちの意識が変わってきて、死者の言葉を聞こうという意識が芽生えてきたように感じます。何もオカルト的なことではないのですが、死者の言葉を聴くという意識を持った人が増えたように感じます。3月11日を迎える新聞記事においても、死者が生き残っている者をどのように生かしているかと言う視点で書かれている記事がたくさんありました。WB Cで活躍した佐々木朗希選手の記事でも、震災で亡くなられた父や祖父母のことがたびたび取り上げられました。死者が生き残っている者を生かすという視点で書かれた記事が多かったように思います。山上の変容のように、死んだモーセやエリヤが現れて話をするというようなことはなくても、死者が生き残っている者を生かすというメンタリティが大震災以降根付いたと言えます。もちろん、キリスト教は復活したイエスによつて生かされているという信仰ですから、日本の状況がキリスト教信仰に近づいてきたともいえるのですが、そこは原理原則が全く違うのです。復活という主の変容の出来事によつて私たちは許されて生かされているのです。この許されて生かされているという肝心なことが忘れ去られてはならないのです。